

母性看護学実習における 受け持ち事例検討会を通しての学生の学び

Nursing students acquiring maternal nursing practice skills through the use of Case Studies

白石佳子¹, 田中和子¹, 浦山晶美¹

Yoshiko Shiraishi, Kazuko Tanaka, Akimi Urayama

キーワード：母性看護学実習、受け持ち事例、学生の学び

要旨

本研究は、A大学看護学科の学生が母性看護学実習における受け持ち事例検討会での発表、ディスカッションについて振り返り、自己評価したデータを分析し、学生の学びを明らかにすることを目的とし実施した。

研究協力の同意を得られた学生52名を対象とした。調査項目の5つの側面のうち「知識の確認や発展を促すこと」「臨床体験の機会を得たこと」についての自己評価が特に高く、「自己学習の振り返り」についての評価が低かった。自由記載欄の質的データからは、「新たな課題や気づきを得たこと」「ウエルネス視点で関わることの大切さ」「家族にも焦点をあてて事例を捉えること」「様々な褥婦のケア、具体的な支援方法とその方向性」「ケアへの参加やケアできる可能性への期待」「知識から現象理解への広がり」「積極的にケアできなかったという否定的な認識」「対象理解への限界、情報収集や統合することの困難さ」が抽出できた。

母性看護学実習における受け持ち事例検討会を通しての学生の学びから、母性看護学実習で受け持った事例について、看護過程を展開し、まとめ、発表、ディスカッションすることの意義が確認できた。周産期の人を対象とした看護について、活きた学びの発表の場となる事例検討会の機会は、重要である。

Key words

maternal nursing practice, case study, acquirement

I. はじめに

近年の母性看護学実習に関する国内での研究では、母性看護学実習における看護技術の経験に関するもの(笹木ら2012¹⁾、小野寺ら2011²⁾)や母性看護学実習に対する意識調査(都竹ら2012³⁾)、などがある。しかし、受け持ち事例での関わり・事例検討会を通じた学生の学びに関する報告は少ない。

A大学の母性看護学実習では、周産期病棟実習において学生が事例を受け持ち、看護過程を展開する。最終日にその事例の看護過程展開についてテーマを設定し、主たる看護について抄録を用いて、受け持ち事例についての発表を行っている。母性看護学実習は、4年前期で2単位(90時間)の履修科目

である。計2週間の実習期間であるが、そのうち1週間は周産期病棟で主に産後の母児を受け持ち、看護過程を展開していく。おもに産褥早期にある母児を中心とした関わりを通して、その家族における、新しい家族を迎えてのネットワークづくりに母児とその家族への看護過程の展開を行い、看護学生として参画する。母性看護学実習では、母性看護学I(2年後期)、母性看護学II(3年前期)・臨床看護技術II(3年後期)で培った知識・技術を再学習しながら、臨地実習の場面で目の当たりにした対象者(おもに母児とその家族)に起きている現象について、情報を整理、分析し、クリティカルシンキングを重ね、必要だと思うケアについて考察する。そして、可能

¹ 山口県立大学看護栄養学部看護学科

¹ Department of Nursing and Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

な範囲でケアを臨地実習指導者とともに実践している、その過程を日々、実習記録として、記述している。周産期病棟での実習最終日には、受け持ち事例について、その看護過程を振り返り、その事例で焦点を当てたケアを中心としたテーマを設定し、受け持ち事例の看護展開について、まとめ、発表する。これらの母性看護学実習での学びや実習のプロセスは、事例検討会での発表内容に集約されており、学生自身が実際に発表し、ディスカッションすることで、周産期における看護についての学びを深めることになる。

本研究では、A大学看護学科の学生が母性看護学実習における受け持ち事例検討会での発表、ディスカッションについて振り返り、自己評価を行うことにより、学生の学びを明らかにしたい。また、この事例検討会での発表やその後に本研究の調査に参加することで学生自身が母性看護学学修のフィードバックの機会となり、今後の母性看護学実習への効果的な教育方法や内容を検討するための資料が得られると考えた。

II. 方法

1. 研究対象者

A大学看護学科4年生の研究参加に承諾を得られた学生で、母性看護学実習の事例検討会で発表、ディスカッションに参加した学生とした。

2. データ収集期間

平成25年5月～8月

3. データ収集方法、手順

母性看護学実習での事例検討会（周産期病棟実習の最終日の午後）は、グループ（9名）ごとに、毎週実施し、事例の発表は、グループが前半、後半に分かれ、4～5名ずつで行う。無記名自記式調査票については、実習初日オリエンテーション時に本研究の趣旨および倫理的配慮について文書と口頭で説明し、紙面にて事前に同意を得た。無記名自記式調査票は、事例検討会終了後に配布し、実習後に記載してもらい、記載後に回収した。

4. 調査内容

臨地実習の場、そこでのディスカッションにおいて、学生には、以下のような学びの機会が与えられていると考え、質問紙は5つの側面から項目だてを行った。5つの側面とは、学生自身の母性看護学に関する知識の確認や発展を促すこと、周産期での臨

床経験報告⁴⁾の機会となること、学生や臨地指導者、教員を交えて共同学習技術を促す⁵⁾こと、学生自身の自己学習の振り返りとなること、コミュニケーション技術の促進⁶⁾となることである。

これらについて、個々の学生が自己評価できるよう、上記の5つの側面について、おのおの小項目の質問を提示した（計21項目）、無記名自記式質問紙を作成し、5非常に当てはまる、4かなり当てはまる、3わりに当てはまる、2やや当てはまる、1あまり当てはまらない、の5件法で評価できるものを使用した。

また、質問紙の項目以外に事例検討会での発表やディスカッション、助言等を受けて得た学びについて記述できる自由記載欄を質問紙の最後にもうけた。

5. データ分析方法

無記名自記式質問紙を回収後、得られた質問項目のデータをエクセル記述統計で集計した。また、学生自身の振り返り、学びに関する自由記載欄の内容について類似するものを「学生の学びと気づき」として集約した。そしてそれらの関係性を類似性と相違性によって検討し、“カテゴリー”とした。なお、分析においては、研究者が検討を繰り返すことで信頼性と妥当性を高めた。

6. 倫理的配慮

研究参加者には、研究の趣旨や研究への自由参加、匿名性の確保や個人情報の取り扱いについて、文書と口頭により説明を行い、本研究への参加の有無により不利益を被らないこと、成績評価には一切関係しないことについて説明し、紙面にて同意を得た。本研究は所属大学の生命倫理委員会から承認を得て開始した。（承認番号25-3号）

III. 結果

研究参加者は、男子学生1名、女子学生51名の計52名の学生であった。まず、質問紙調査の5つの側面から、それぞれの項目別に5件法にて学生が各自、自己評価した結果を図1～図5のグラフで示した。

評価の5～1は、「5非常に当てはまる、4かなり当てはまる、3わりに当てはまる、2やや当てはまる、1あまり当てはまらない」である。

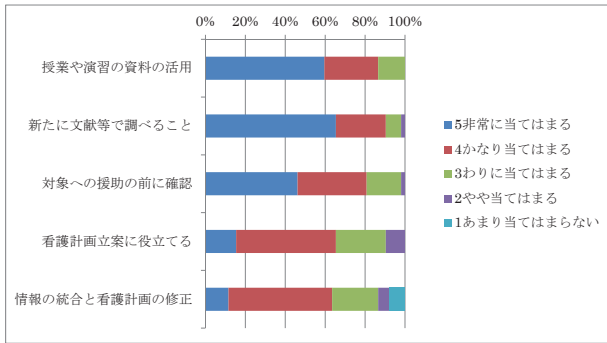


図1：知識の確認や発展を促すこと

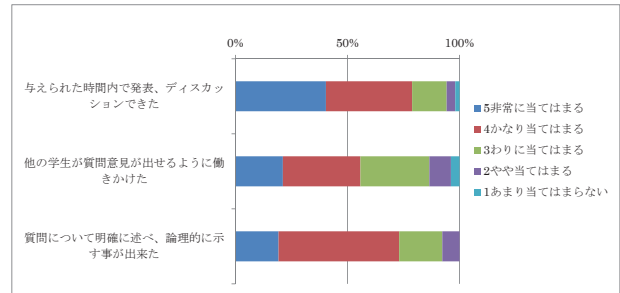


図5：コミュニケーション技術の促進

図1～5に示したように、5つの側面、計21の項目に対して、「5非常に当てはまる」「4かなり当てはまる」と高い自己評価をしている学生が多かった。特に図1の知識の確認や発展を促すこと、図2の臨床体験の機会を得たことに関しては、11項目中7項目について、「5非常に当てはまる」「4かなり当てはまる」という良い自己評価が8割以上に達していた。

また、「2やや当てはまる」「1あまり当てはまらない」と自己評価が低かった項目は、図4：事例検討会を通しての自己学習の振り返りの項目③「発表内容は、最新の情報や理論、研究が反映されたものである」であり、約3割の学生が評価を「2やや当てはまる」「1あまり当てはまらない」としていた。また、図5：コミュニケーション技術の促進となること、項目②「他の学生が質問や意見を出せるように働きかけた」については、「5非常に当てはまる」「4かなり当てはまる」と自己評価したものは5割程度で、他の項目と比較し自己評価は低かった。

また質問紙に設けた自由記載欄には、「事例検討会での発表やディスカッション、助言を受けての質問項目以外に、学んだことについて」約6割の学生が記載をしていた。

その記載された内容について整理し、それらの内容について、類似性のあるものを繰り返し分類すると8項目の【カテゴリー】が抽出された。

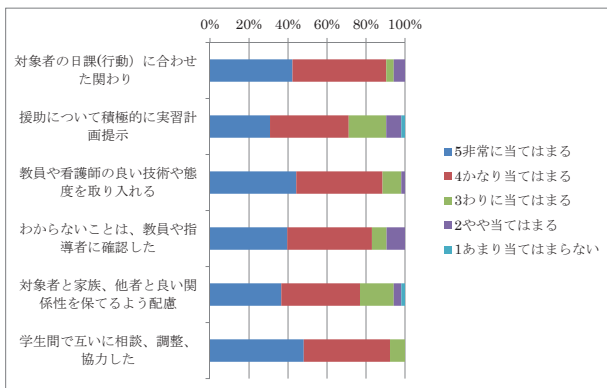


図2：臨床体験の機会を得たこと

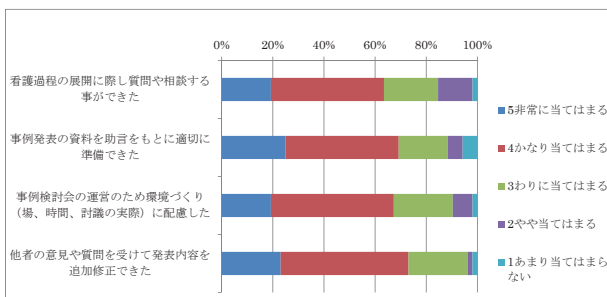


図3：指導者、教員を交えての共同学習技術を促すこと

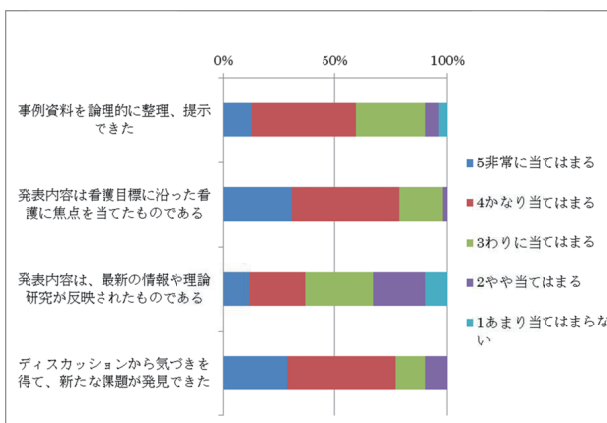


図4：事例検討会を通しての自己学習の振り返り

表 1：質問紙の自由記載欄 ～学生の学びと気づき～

カテゴリー	学生の学びと気づき
事例を通しての新たな課題や気づきの獲得	指導者の助言がとてもためになった 自分で見つけられない課題について考える事が出来た 学生同士の情報の共有で、自ら受け持ち事例を深められる 事例をまとめることでより深く考えることに繋がった
ウェルネスの視点で対象をとらえ、関わることの大切さ	疾患を持つ対象でなく、育児、児と関わる褥婦として捉える 正常に経過していることを観察することが大切 そばに寄り添うこと、自信を持ってもらうことが母性では大切
家族にも焦点を当て事例を捉えることの必要性	母児だけでなく家族にも焦点を当てるのが大切 新生児だけでなくきょうだいの育児に関連したことも考える
様々な褥婦のケア、具体的な支援方法とその方向性	帝切後の褥婦のケアについて、産褥期の変化に加えて手術の影響を関連させて看護すること 母児分離となった事例で母親の思いや児との面会時にしっかり関わる工夫が必要なこと 育児技術の習得や産後の身体変化に応じたケアは、母親の育児不安の軽減や母親の自信につながるので重要 産後に寄り添って、対象にあった支援をゆっくり焦らず行うこと、自信を持ってもらうことが必要 母児の生活のリズムに合わせた関わり方、方法で実施すること 退院後の生活を見据えて計画を立案し、支援することが大事 産後や育児による疲労は精神状態につながる可能性がある 短期間の関わりで展開も速いので的確に情報収集する必要あり 母児や家族の状況を統合的に捉え、今後の生活を見据えた働きかけが必要
ケアに参加すること、ケアできる可能性への期待	学生ができることの範囲内で最大限にできることを考えていくことが大切 不安への傾聴をはかり、思いをスタッフに伝え、支援までつなげると学びが大きい
知識から現象、実践理解への広がり	イメージがわからなかったことが実際に触れてみてよく分かった イメージより具体的に捉える事が出来た 授乳指導や退院指導は褥婦にとってとても効果的であると思う ケアや処置について根拠を考えることが大事であった
積極的にケアできなかったという否定的な認識	褥婦の休息の必要性を考え、あまり関わりをもつことが出来なかった、もっとケアの提供を積極的に行えるとよかった
対象理解への限界、情報収集または統合することの困難さ	退院後の生活を見据えた支援が大切であるが見えない部分が多々あり難しかった

1. 【事例検討会を通しての新たな課題や気づきの獲得】

指導者の助言や学生間の情報共有で事例について深められ、「自分で見つけられない課題について考える事が出来た」と表現していた。

2. 【ウェルネス視点で対象を捉え、関わることの大切さ】

事例の中で受け持ちの主となる褥婦について、「疾患を持つ対象でなく」や「正常に経過すること」、「そばに寄り添う」「自信を持ってもらう」など、ウェルネスの視点で対象をとらえることについて表現していた。

3. 【家族にも焦点を当て事例を捉えることの重要性】

受け持ち対象を母児のみでなく、「家族」「きょうだい」へのケアの必要性について気づき、関わり対象とすることの重要性を表現していた。

4. 【様々な褥婦へのケアとその具体的な支援方法と方向性】

対象となった褥婦のなかでも「帝王切開術後の褥婦」「母児分離となった褥婦」と特別な状況にある褥婦には、「産褥の変化に加えて手術の影響を関連させて看護すること」や「母親の思いに傾聴することや児との面会時にしっかり関わる工夫が必要なこと」など支援の方向性について記載していた。「育児技術の習得、身体変化に応じたケア」「退院後の生活を見据えたケア」「母児の生活リズムに合わせた関わり」など褥婦への具体的な支援の方法について表現していた。また、「対象にあった支援をゆっくり焦らず行う」や「疲労は精神状態の不安定につながる」「母児や家族の状況を統合的に捉え、今後の生活を見据えた働きかけが必要」など、入院中から退院後に向けての心理的支援やそれらをふまえた準備性についても示していた。

5. 【ケアに参加すること、ケアできる可能性への期待】

学生は、臨地実習の場で「できることの範囲内で最大限のことを考える」「傾聴した思いや不安についてスタッフに伝える」と記載し、ケア提供することの可能性として、また「学びが大きい」と期待もすることがうかがえた。

6. 【知識から現象、実践理解への広がり】

授業や演習で学んだ知識、技術について「実際に触れてみて分かった」「イメージよりも具体的に捉

える事が出来た」、実際の保健指導の場に参加し「褥婦にとっても効果的であると感じた」と表現している。また、「ケアや処置の根拠について考えることが大事」というのは、看護についての机上の学びを、臨地実習の場でより理解を広げ、確認することと解釈できた。

7. 【積極的にケアできなかったという否定的な認識】

「休息の必要性から、あまり関わる事ができなかった。もっとケアの提供を積極的に行えるとよかった」と対象との関わりを振り返り、積極的な介入をすることを良いとしたため、否定的に捉える学生がいた。

8. 【対象理解への限界、情報収集または統合することの困難さ】

「退院後の生活を見据えた支援が大切であるが、見えない部分が多々あり、難しかった」と表現しており、実際の支援について、対象理解のための効果的で十分な情報収集やそれらの統合については、その学生にとって難しかったようであった。

V. 考察

本研究では、母性看護学実習での事例検討会を通しての学びについて、学生が振り返り自己評価を行うことと、学生による学びと気づきの自由記載により、明らかにしてきた。Iの側面、「学生自身の母性看護学に関する知識の確認や発展を促すこと」の中で、「授業や演習の資料を活用した」、「新たに文献で調べた」、「対象者への援助をする前に資料などを用いて確認した」について、8割以上が「非常に・かなりあてはまる」に回答しており、臨地実習中の学習意欲や態度に関し、モチベーションは維持されていたと考える。「看護計画の立案に役立てる」、「情報の統合と看護計画の修正」についても6割以上が「非常に・かなり当てはまる」に回答しており、実践に向けての対象理解や看護の方向性についてもおおよそ思案できていたと考えられた。IIの側面、「周産期病棟実習での臨床経験を得心したこと」の中では、「対象者の日課（行動）に合わせ、時機を見て観察や援助ができるよう関わった」、「教員や看護師の良い技術や態度について観察し、取り入れようとした」、「わからないことは、指導者や教員に伝え確認した」、「学生間で互いに相談、調整、協力した」について、8割以上が「非常に・かなり当てはまる」

に回答しており、対象者へ配慮しながら関わったことや看護師の役割モデルとしての指導者や教員のケア提供技術や態度についての観察や取り込みなど、臨地実習でしか得られない経験をすることができていた。また、わからないことを伝えて確認すること、学生間で相談、調整、協力し合うという項目の自己評価も高いことから、臨地実習の場で、学生自身がそれぞれ、学ぶことについての対処行動をとることが出来ていたと考える。

一方で、Ⅳの側面である「事例検討会を通しての自己学習の振り返り」の中で「発表内容は、最新の情報や理論、研究が反映されたものである」について、3割の学生が「2 やや当てはまる」「1 あまり当てはまらない」としており、短期間の実習で、しかも産褥早期という心身のダイナミックな移行期にある対象者を受け持つ周産期病棟実習では、対象事例と関連のある、最新の情報や理論、研究への探索は難しかったと思われる。これは、教員や指導者が助言内容についても留意しておく点であり、また実習中、あるいは終了後に、効率的な学習ができる場、環境を作ることが必要であるだろう。A大学では、実習施設が大学より離れており、学内や実習施設内での学習支援システムについても考えていく必要がある。また、学生自身が実習後に再学修して補完したいと意欲がわくような振り返りの機会などをもっと提供していくとよいと考える。また、Ⅴの側面である「コミュニケーション技術の促進となること」の「他の学生が質問や意見を出せるように働きかけた」については、「5非常に・4かなりあてはまる」と回答したものが5割程度にとどまっていた。事例検討会でのディスカッションは、個人の評価を行う場でなく、学修者である学生個人、あるいは学生グループに対してフィードバックを行う場である。相互に意見を出し合い、異なるコメントや考えにも傾聴し、不明確なものを確認したり、新しい意見を提供したりする必要がある。A大学の事例検討会には、教員と臨地実習指導者が学生とともに参加している。学生が様々な考えや課題について自由にディスカッションできるような環境づくりが教員や指導者側に求められていると考える。効果的な教育とは、教員が学生に信頼と敬意の気持ちを伝え、率直にそして直接的に学生に質問し、自由にディスカッションに参加するよう促すことである。⁷⁾(Bergman&Gaitskill,1990;Oermann,1996)とあるよ

うに、事例検討会の場の雰囲気づくりやそのサポートは、重要である。

質問紙に設けた自由記載欄から得た学生の気づきや学びの内容から8つのカテゴリーが抽出できた。質問紙調査の結果の8つのカテゴリーから、母性看護学実習で関わった事例についてまとめ、発表し、ディスカッションすることで、事前に学んだ知識を確認したり、実際の現象について理解したり、他者の助言や意見をもらうことで、新たな課題や気づきを得ることができていた。また、周産期にある対象者を受け持つことで、家族も対象者として巻き込み、対象を理解することなどについても気づきを得ていた。具体的な支援方法やそのケアの方向性についても、対象にあった支援をゆっくり焦らず、寄り添いながら行うことなど、ウェルネス視点で関わることの重要性を認識できていたと考える。また、臨地実習体験の実際から、看護者や教員をケア提供者としてのモデルとすることや、学生自身がケアできることの可能性についての期待について示す学生もいた。

しかし、中には、積極的にケアすることを大事とするあまりに、対象との関わりを否定的に捉えている学生がいることもわかった。実習中においても、ウェルネスの視点での関わり方の理解に細やかな助言や指導が必要であるように思われた。また、身体的、心理的、社会的な視点で対象を捉え、情報を統合し、退院を見据えた支援を考察することにおいても、一部の学生には、難しさを感じている面があった。個々の学生の理解度や実習進行状況にあわせて、実習目標に到達できるよう日々実習状況を振り返り、看護過程展開のプロセスを確認しながら、適宜助言する必要がある。

母性看護学実習における受け持ち事例検討会を通しての学生の学びから、母性看護学実習で受け持った事例について、看護過程を展開し、まとめ、発表、ディスカッションすることの意義が確認できた。周産期の人を対象とした看護について、活きた学びの発表の場となる事例検討会の機会は、重要であると考える。

Ⅵ. 結論

1. 学生は、受け持ち事例についてまとめ、発表し、ディスカッションすることで、事前に学んだ知識を確認したり、実際の現象について理解したり、他者

の助言や意見をもらうことで、新たな課題や気づきを得る事が出来ていた。

2. 学生は、周産期にある対象者を受け持つことで、家族も対象者として巻き込み、対象を理解することについても、気づきを得ていた。

3. 学生は、具体的な支援方法やそのケアの方向性について、対象にあった支援をゆっくり焦らず、寄り添いながら行うことなど、ウェルネス視点で関わることの重要性を認識できていた。

4. 学生の中には、臨地実習体験の実際から、看護師や教員をケア提供者として役割モデルとすることや、ケアできることの可能性について期待を示すものもいた。

5. 一方で、積極的にケアすることを大事とするあまりに、対象との関わりを否定的に捉えている学生がいた。

6. また、身体的・心理的・社会的な視点で対象を捉え、情報を統合し、退院を見据えた支援を実践に結びつけることにおいて、困難さを感じる学生もいた。

謝辞

本研究に協力して下さった学生の皆さんに感謝いたします。また、実習施設において、学生が受け持つことを承諾下さった対象者の皆様、そして、この臨地実習の機会をお与え下さり、丁寧にご指導下さった看護師の皆様、病院職員の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 笹木葉子、小堀ゆかり：母性看護学実習における学生の技術経験状況調査、北海道文教大学研究紀要 第36号、81 - 90、2012.
- 2) 小野寺幸子、大野友子、高橋慶子、内宮律代、柴田眞理、青木康子：母性看護学実習における看護技術体験の実態と到達度についての課題、帝京大学医療技術学部看護学科紀要 2巻、63 - 72、2011.
- 3) 都竹友季子、出口陸雄、野田貴代：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第7報）母性看護学実習において看護学生が実感できる看護の魅力とは、愛知きわみ看護短期大学紀要 8巻、37 - 44、2012.
- 4) Kathleen B.Gaberson Marilyn H. Oermann 著

(1999)、勝原裕美子監訳、勝原裕美子、増野園恵、井上真奈美、渋谷美香訳、臨地実習のストラテジー、医学書院、207、2002.

5) 前掲書 4)、207

6) 前掲書 4)、208

7) 前掲書 4)、201

付記

本研究は、平成25年度山口県立大学研究創作活動の助成を受けて実施した。

